

(清水町) 清水ミライ自分ごと化会議 (少子高齢化①) 議事メモ

|     |  |
|-----|--|
| 日時  | 令和2年6月27日(土) 9時25分から12時00分まで   |
| 場所  | 各自オンライン参加  |
| その他 | コーディネーター<br>伊藤伸(構想日本)<br>ナビゲーター<br>香田裕一(十勝の未来を考える自治体職員の会:幕別町職)<br>オブザーバー<br>阿部俊夫(保健福祉課福祉係長)<br>寺本圭佑(保健福祉課在宅支援係長)<br>参加者数 6名<br>傍聴者数(町民)0名、(町外)0名、(報道)0名<br>事務局<br>前田 真(企画課長)、川口二郎(企画課長補佐)、<br>田村幸紀(企画課政策企画係長)、木村翔(企画課政策企画係主事)、桂井那津未(企画課政策企画係主事)、川岸祐仁(構想日本) |

趣旨・概要

第5回目のテーマは「少子高齢化・情報発信」

- (1) 最初の3回は、アンケート結果で「まちの強み」をテーマに、1テーマを1回の開催で完結させてきたが、第4回からはアンケートで意見が多く出た「少子高齢化」と「情報発信」といった、「まちの課題」について議論を進めるため、3回継続して同一テーマで議論する。
- (2) 少子化対策では、子育て環境の充実策として、出産環境や子育て環境、子どもの遊び場の充実が挙げられる。また、高齢化への対策として、それらに対する行政の役割交通弱者への対策は十分か。路線バス等がない中、町民の足を確保する交通網を形成するために必要なことは何か。

前回の班をさらに2つに分け、オンラインで会議を実施した。これまでの会議の振り返りを行ったのち、ナビゲーター及びオブザーバーを交えて前回と同じテーマでグループ討議をおこなった。

これまでの振り返り

清水町の第6期総合計画(10年計画)を作成するにあたり、いろいろな住民から意見を聞くために無作為抽出という手法を使ってこの自分ごと化会議を行ってきた。この計画を作るプ

ロセスの中にいろいろな人に関わってもらい、「自分ごと化」として捉えてもらうことを目的としている。去年の7月からスタートし今日が5回目となる。最初の3回は清水町の強みを中心に議論をしてきた。4回目以降については課題として取り上げられた部分について単発ではなく3回通して議論していくこととした。今日は「少子高齢化」の班になる。前回は子育て環境を中心に議論をしてきた。改善提案シートを取りまとめた結果、現状の課題として「子供を生み・育てる環境」「若者の働く場」「子どもの遊び場」「充実した医療福祉制度のPR不足」に分類された。子育て環境の制度はしっかりしているが、子どもの遊び場が不足しているという意見が多かった。子どもが外で遊びたいと思える環境整備が大事ではないかという話があった。コロナによってかなりの外出規制があったと思う。子どもの遊び場とコロナはかなり影響があると感じている。これまでが前回までの振り返りとなる。今回は高齢化対策について中心に議論をしていく。次回は少子高齢化について集約に向けた議論をする予定となっている。

#### テーマについて議論（高齢化対策）

事務局、オブザーバーより資料説明。

コ：清水町の現状を説明していただいた。清水町の高齢化率は36.7%であり、全国平均28.4%と比べるとすごく高いが、地方は高齢化率が高い現状にある。一人暮らしの高齢者の人口割合は清水町が28.5%であり、全国平均28.3%と比べても変わらない。このことから清水町の高齢化率は高いが、一人暮らしの高齢者が少ないことがわかる。地域福祉計画の中で今後の課題として地域での支え合うために分野や世代を超えて利用者に立ったサービスを考える必要があるという話があった。もう一つの課題として介護人材の不足がある。これはアンケートによると重労働や低賃金という原因が挙げられる。清水町の要介護認定率は20%程度で、全国平均とあまり変わらない。清水町の高齢者の暮らしについて感じることを、またコロナで影響が出ていることについて話をしていただきたい。

メ①：コロナではみんな外出自粛を守り、自分の身は自分で守っていた。家族で住んでいると、自分が感染すると他の人にうつしてしまうのではないかという不安があった。高齢者が町で歩いている姿を見るが荷物が多く大変だと感じる。用事を1回で済まそうとする人が多く余計大変だと感じる。

メ②：高齢者は元気な人が多く、外出する人も多い。元気でいたいと自覚している人も多い。介護が必要な人や社会的に不安のある高齢者に対して、支えていきたいという気持ちがある。コロナで不安な中、地域活動をやってきたが、いまだかつてない感染症のためみんなで自粛しようとして一丸となって取り組んできた。

メ③：幼少期からの性格の積み重ねもあるため、高齢者になって何かをするという必要性を感じ

じていきなりすることは難しい。コロナから自分の身を守るために新聞やテレビで情報を得ているが、予防については個人差がある。

メ④：町内でコミュニティバスが走っているが、時間の制限があるため急な買い物に対しては、足の確保が難しい。お店側が荷物を配送するなどの対応をしている。商店街に関しては後継者不足の問題もある。コロナの影響で買い物をする人は減ったが、マスクに対しての問い合わせが多かった。

メ⑤：コロナは高齢者の重症化のリスクが高い。外出している高齢者が少なくなったが、外出をしなくなったことによって生活習慣病のリスクが増えるのではないかと感じる。清水町だけでは日用品等の買い物で足りないものがあるため、帯広へ行かなければならない場面があると思うが、公共交通機関の利用者がすごく減ったと感じる。これまで清水町に住んでいて高齢者は元気な人が多いと感じる。

メ⑥：現在室蘭に住んでいるが、室蘭に来て感じたことは周りとの関わりが少ないこと。清水町ではあいさつなどのコミュニケーションが日常的にあったので改めて良いと感じた。コロナについてテレビで過剰な報道があり、外出をしづらい環境があり心苦しかった。

コ：高齢化率は高いが、元気な高齢者が多いと感じた。しかし、現状のままでいいのか。どれだけ年をとっても元気に暮らしていけるかはわからないという意見が多かったと感じる。

ナ：幕別町も高齢化率が30%を超えている。この高齢者たちが働ける環境づくりを進めているが、雇用側と労働者とのギャップがあり難しい。コミュニティバスでは個人の目的だけにあった運行が難しい。コロナでもサークル活動をやめない高齢者もいた。

コ：「高齢者の足は誰が守る？」「若い人と高齢者のコミュニケーションは清水町ではできている方？」「高齢者が更に暮らしやすくなるために行政がしなければならないこと。地域や民間でできることはないか」の3つテーマに絞って議論をしていきたいと思う。委員よりチャット機能で質問のあった免許の返納をしている人数について清水町の現状はわかるか。

事：昨年は1年間で50名程度。これからはどんどん増えていくと予想している。

コ：清水町での免許返納はリスクがあると思うが、公共交通機関の充実が免許返納につながっていると思うか。

事：免許返納する人は近くに家族がいるか、公共交通機関があるかなど計画的に返納している

と思う。また、まだ運転できるのに家族から免許返納への指摘があり免許返納うつケースもある。

メ④：免許返納する人が多く、驚いた。親に対して免許返納を勧めるケースの話はよく聞く話だと思う。

コ：足の確保についてどう守っていくか。

メ③：近隣の高齢者がどんな生活をしているのか、高齢者への気配りが必要。また高齢者側も周りに頼るといった考え方が必要ではないかと思う。

コ：現在の清水町はそういう雰囲気はあるか。

メ③：高齢者になってから一人で物事を始めるのは大変なため、周りからの手助けがあっても良いのではないかと思う。地域コミュニティへの参加のきっかけとなるような人がいれば良いと思う。昔と比べてそういう部分が少なくなっていると感じる。

コ：高齢者の車の運転が難しくなっていく中、どうやって外へ出ていくのか。

メ②：家族関係がすごく大事になってくると思う。車の維持費を考えると、タクシーの利用もできるのではないか。すべてを行政に頼るだけでなく、自分自身でどうにかするという意識を持たなければならない。

コ：家から目的地までの交通確保については一般的に行政が税金を使ってやることの方が多い。しかし愛知県のある市では行政では一切お金を出さず、民間企業が連携をしてやっている事例がある。これは人を目的地に運ぶことによってお金を使う機会が多くなるメリットがある。清水町の移送サービスの利用者は多くないと感じるが、清水町では現状をどう捉えているか。また、今度増えていくことを考えると、費用も増えていくと思うが、地域や民間と連携をする考えはあるか。

事：地域公共交通にかかる費用について、平成23年度は210万円ほどかけていたが、路線拡大等により令和2年度は1,200万円に拡充して交通弱者に対して支援をしている。経費の割にお客様満足度が低いと感じている。理想は自分の必要なときに自分のために動いてくれる車があればいいが、全ての人の需要を満たすには財政がパンクしてしまうため、現在の費用を有効に活用していくのが、これからの公共交通の課題と感じている。

オ②：福祉課で行っている移送サービスについて、町内のタクシー会社に車いす対応の車がないため、車いすの利用者に限定して行っているサービスがある。また高齢者タクシー乗車券については、助成金額が年額12,000円のため月1回タクシーを利用される人については、助成金額を上回ってしまうため、全ての高齢者に対して満足していただけるものではないと感じているため、今後の在り方について考える必要がある。

コ：企画課からお客様満足度が低いと感じるという話があったが、福祉課としてもそう感じるか。

オ②：時間的制約があるため。時間を合わせなければならないなどといった手軽感がないという話を聞くため、満足感につながっているかは難しい部分があると思う。

メ①：自分が車を運転できない立場にならないとわからないが、この会議を通して公共交通について気にするようになった。実際に利用する人が増え、浸透していけば満足度が上がっていくのではないかと。コミュニティバスやタクシーなどいろいろな選択肢が増えると良いのではないかと思う。

コ：行政がやっていることは選択肢の一つと捉えることが大切と感じた。商品の配達サービスはお店が行っていることであり、行政の支援がすべてではない。行政と民間が連携をすることによって、満足度は高まるかもしれないと感じた。

メ④：商店街組合で商品の注文を受けて、個店に伝えて配達するような仕組みがあれば良いのではないかと思う。

コ：民間企業と連携をして、配達サービスを実施している自治体もある。清水町でもそういう考え方があってもいいのではないかと思う。

事：行政は町民に不公平がないように経費をかけている。もしかしたら近隣の人が交通の手助けをするための支援をした方がより満足度は高まるかもしれないが、事故等のトラブルが起きるリスクもあるため、行政がトラブルの起きないような仕組みづくりができれば、より細やかなサービスを提供できるかもしれないと考えている。しかし町内会によって支援に差が出てしまうことが考えられるため、公平性に対する批判をどう乗り越えられるかという課題がある。

コ：鹿児島県の屋久島では地域活動に対して交付金を出している。その中で近所の人たちが運転するための保険を負担している事例もある。

若い人と高齢者のコミュニケーションについてどう思っているか。

メ⑥：町内会を通じて、中学生までは高齢者とのコミュニケーションをとっていた。

メ③：町内会の行事が減っている。その原因は役員の負担が大きく、担い手がないため。今は人とのコミュニケーションを取ることがあまり求められてないように感じる。自分もこれから年を取って、人の手助けが必要となる場面があると思う。そのときのために周りの人たちとつながっていることが大切だと思う。細やかな生活の手助けをするのは、行政ではなく、近所付き合いだと思うが、高齢者も含めて人とのつながりが薄くなっていると感じる。すぐに解決できる問題ではないため、環境づくりが大切だと思う。

コ：幕別町では札幌のように若い人が増えている地域があると思うが、高齢者とのコミュニケーションの現状はどうか。

ナ：高齢者はコミュニケーションを取りたいと思っているが、札幌市街は若い人が多く、近所付き合いもないため、接する機会が少ない。幕別市街は帯広からの距離があるため、居酒屋等でのコミュニケーションがあり、地域性があるのではないかと思う。町内会に加入している人も少ない。

コ：解決するために行っていることはありますか。

ナ：個人的には週1回地元へ飲みに行くようにしている。高齢者の方の話はためになることが多い。若い人をそういう場へ連れていくことも心がけている。

コ：清水町では居酒屋コミュニティはあるか。

事：町内会単位で飲みに行く雰囲気は少ないと思うが、町内会行事が年に2～3回はあるので、そこでコミュニケーションをとる機会はある。

コ：高校生、社会人になっても高齢者との接点を作るためにどうしたらよいか。

メ⑥：町内会に入らない人が多い。SNSが普及したため、身近な人とのコミュニケーションに重要性を感じなくなったことが原因ではないかと思う。

メ③：町内会が一番コミュニケーションを取りやすい場だと思う。多世代で住んでいる家族が減った。普段から祖父母と住んでおり、高齢者との接点に抵抗がない。多世代で住むことによって町内会に入るきっかけにもなると思う。SNSの普及により、周りとのコミュニケーション

を取らなくても良いという風潮がある。

メ②：地域でのコミュニケーションが少なくなったと感じる。以前は学校行事を通して地域とのつながりがあったが、学校が閉校してからは地域で集まる機会がなくなってしまった。家族間のコミュニケーションは大事にしている。閉校した学校が介護施設になったため、高齢者同士で交流を図る場になっている。

コ：若い世代と高齢者のコミュニケーションに対して、行政が考えていることはあるか。

事：積極的に進めている町ではない。効率性を追求するために人々をカテゴライズして、政策をしてきた。この考え方を見直す時期に来ているかもしれない。昔は制約をあまりつけずに町内会へ助成金を出していたが、今は制約があり、行政がやってほしいものだけに助成金を出している形となっている。この制約をなくして町内会へ助成金を出すことで、近所付き合いや地域の公共交通の仕組みに役立つかもしれない。

コ：助成金の目的が地域コミュニティを維持することや、元気な高齢社会でありつづけることを実現するための手段として考えることが重要。

これまで公共交通と高齢者のコミュニケーションの2つの論点について話をしてきたが、高齢者がさらに暮らしやすくするために行政がしなければならないことはあるか。

メ①：若者と高齢者をつなぐ人や場所が必要と感じる。きっかけを作れる人が増えていけばいいと思う。

メ②：高齢になっても何かやりたい気持ちがある。自分から声をかけ、仲間を作ることで少しずつコミュニティを広げていけばいいのではないかと思う。

メ③：人に興味をもつ力を育てることで、困っている人に気づき、助けることができるのではないかと思う。また困っている人が自ら発信することも大切。困っている人を助ける環境、困っている人が発信できる環境づくりが行政の役割になってくるのではないかと思う。

メ④：他人を他人と思わない意識づくりが大事ではないか。役場の若手職員が清水町のことをよくわかってないと感じる。

メ⑥：いろいろなコミュニティが活性化することで助け合いにつながる。地域コミュニティに力を入れてみてもいいのではないかと思う。

ナ：行政のできることは限られている。行政が介入することでうまくいかなくなる部分もある。忠類村は地域コミュニティが活発で町内会対抗の運動会がある。これをきっかけにして新しい人とつながりができることがある。

オ①：地域福祉計画を取り組むための参考となる意見がたくさんあった。行政ができることは意外と少ない。やらなければいけないという義務感にとらわれ、一方的な考え方になることが多いと感じる。支える側と支えられる側の気持ちの両方を大切にできる町になっていけば良いと思う。

オ②：行政の仕事はサービスの提供が目的となってしまうことが多いが、もっと人に焦点を当てて考えることが重要だと感じた。

コ：島根県の雲南市では地域の中でおせっかいをする人を増やすために「おせっかい会議」をやっている。今日の話とつながるところが多いと感じる。

事：次回も同じテーマで取りまとめを行うので、次の機会までにいろいろな話を考えていただければと思う。